

工業高校の漢文教育

——指導例を通してその意義を探る——

はじめに

私は十余年を普通科高校で過ごした後、工業高校に異動した。ひとところ世間でいわれていた「荒れる工業高校」というのはもはや昔話で、校内は全く平穩であった。とはいえ、私を当惑させる材料がまったくない訳ではなかった。それは生徒の学習意欲や能力などではなく、むしろ教員側の意識であった。

職業高校ではどうしてもそれぞれの専門教科の学習が重視される。なかでも工業高校の場合は校内の「工場」での実習などが大きな比重を占める。国語の学習は読み書きができれば十分だとまではいわずとも、なにも無理に難しい古文・漢文をやらせなくても、というムードが一部の専門教科教員にはある。また、学力の低い生徒にとっては高校卒業迄に最低限の読み書きの力を付けることが急務でもあ

細谷 美代子

った。こうして国語の指導は現代文中心に回転していた。実際のカリキュラムは国語Ⅰを一年生に二単位、二年生に三単位、合計五単位。三年生では就職試験対策をかねて国語表現三単位がおかれているだけだ。なぜ国語表現かといえは面接試験の対策と作文のためということであるらしい。

同じ職業課程でも商業高校ではもっと多くの時間を国語に割いているようだが工業高校ではどこもこの程度の時間しかとれないようだ。表題を「工業高校の」としたのはこうした窮屈な授業時間のなかでの「漢文学習」を考えてみたいということからである。

1 二年生一学期の学習

私は一・二年生の国語Ⅰを担当することになった。しかし、二年生の三単位のうち一単位分は前任者からの引継ぎ

事項として「漢字の学習」に充てることになっている。これは生徒に漢字練習帳を持たせ、毎週、テキストの見開き二ページ分についてのテストと次週のための予習をするというものである。結局、一年生と同じく、週二時間で現代文・古文・漢文をやらねばならない。しかも、私が引き継いだ二年生は一年次において漢文を学習していなかった。一学期の中間試験迄はいわば探索の時期である。私の新しい生徒はどの程度の力があるのかをさぐりつつ、片方について漢文の学習に入るかを考えた。

年間の学習計画として現代文・古文・漢文を配置して見ると漢文はどう考えても入門期のおよそ十時間ほどを確保するのが精一杯と思えた。これは後に述べるような事情で修正することになるのだが、とにかく年度当初にはこのような見通しのもとで漢文の学習をはじめの時期を検討し、一学期の中間試験後から漢文の学習を始めることにした。

当初の二年生年間指導計画

一学期 前半 現代文

後半 漢文

二学期 前半 現代文

後半 古文

三学期 現代文

あらまし上のような枠のなかで学習してゆくことにはなつたが、生徒にとっては一学期後半の漢文の時間が高校での唯一の学習の機会ということになる。同じ時間数でも、できれば数時間ずつ二回に分けて学習する方がよいのだろうが、四月以来、生徒の力をみているとよほどゆっくり進むのでなければ脱落者が出そうだった。数時間では学習成果の定着は難しいと判断し、連続して約十時間をとった。そして、もし学年末に少しでも余裕が出た時、漢文にその時間を使いたいという含みから、二学期ではなく、一学期に漢文入門をおいた。この貴重な時間をどう使うかが次の問題となる。

私は限られた時間であればこそ、基本を大事にしたいと考えた。ここでいう基本とは基本句型や基本教材のことではない。高校を出ればそのまま社会へ出てゆく生徒に、高校で漢文を学習した、ということ胸に刻みこんでほしい、漢文の授業のひとこま、ひとこまが後からでも思い出せるようなものであってほしい。そのための基本ということである。具体的にはつぎのような点にポイントをおいて指導することとした。

① 「漢文」とはなにか

どの教科書にも漢文入門単元というようなものがある

て、そこで「漢文」「訓読」「返り点」「書き下し文」などについて学ぶように説明文や用語解説が記されている。それらの解説は当然のことながら、無駄がなく、きわめて簡潔に要領よくまとめられている。それらをただ読む限りでは理解の早いものは「ああ、そうなのか」とわかった気になり、理解の遅いものは「漢文は面倒だ」と決めつけてしまうことになる。どちらの反応にも共通していることは「漢文」を「勉強すべし」として目の前に置かれたもの」としてとらえている点である。これでは生徒にとっての「漢文」は「漢文の単元にている文」ではない。「漢文の単元にている文」は「漢文」という、豊かな内容を持つ世界の一部分なのだということを理解するのになければならない。そこを理解してこそはじめて「漢文の単元にている文」を学ぶことの意味が理解されよう。こうした理解のないままでは、いくら正しく訓読ができようが、試験で良い点数を取るうがすべて虚しい成果だといわねばならない。

から、「漢文というのは中国の古典語の語法にしたがって書かれた詩文をいう」という所へまとめいった。ここへ来るまでにわざと「中国」を強調しておいたので何やらいいたような顔がすでに教室のあちこちに見られた。そのうえで「なぜ外国の詩文を国語の時間に学ぶのか」と、「外国」と「国語」を強調しながら問いを提示した。

折りに触れ思うことだが、生徒は誠に純真である。興味を持ちさえすればこちらが重荷に思うぐらいの強い視線を向けて来る。全く遠慮ということがない。こちらも負けずに次の話題やヒントを返していかねばならない。

このときも中国と日本の歴史的関係、文化交流に関して知っていることをどんどん発言させ、私からも補い、「中国の古典は日本の古典でもある」という点を確認した。ここまで来るのにほとんど一時間が必要だった。こうした手順を経た後「外国語である中国語で書かれた文章はどうすれば読めるのか」を問題にして「訓読」の指導に入った。

「訓読」の技術的指導に入るまでにこれだけの時間をかけるのは、只でさえ少ない授業時間と理解のための時間を贅沢に必要とする生徒とを前にして、正直な所、私自身にも若干の不安があった。技術的指導で手間暇かかるのは目に見えている。もたもたしていたのでは一学期末の試験範

冊は返り点にしたがった読み順を問うだけということにもなりかねない。それが高校での唯一の漢文学習ということでは生徒に申し訳ない。やはり、卒業後に機会と意志さえあれば漢文に親しんでゆけるように最低限の力は付けさせたかった。

結果から報告すれば、導入部で「漢文とは」ということを問いかけたのはその後の授業にきわめて良い影響を与えた。生徒にすれば教科書に書いてあることの説明を受けたという気はまったくなく、自分達の力で一つの解答を引き出したという意識であったのだから。指導者があらかじめ意図したことではなかったが、ささやかな自信を持ったようだった。

② 「返り点」は難しくないと思わせる

中学で漢文の学習をしたという生徒は多いが、指導のレベルも様々であれば、その理解もまた様々である。すべてを一からスタートさせた。説明の途中で繰り返しわかるかどうかを尋ね、確認しつつ進んだ。理解の遅い者を放課後に呼んで個別に指導することにすれば、授業のスピードを上げることは可能だが、そうはしなかった。その時間、その時間の学習内容は授業時間中に身に付けるということを習慣づけたかった。わからないと思えば手を挙げて質問

して良いのだということを保障して遣りたかった。たとえば「家」という漢字が書けない、つまり小学生のころ間違ってた覚えのまま、誰からもその間違いを指摘してもらった機会がなかった生徒もいるような教室で、できの悪い者は残して指導というのは「授業中の傍観者」の拡大再生産でしかない。

しかし、教室の中には少数ではあるが、中学で基礎を学んでいたり、比較的のみこみの早い者もいる。全体のペー스는徹底的にのんびりとしたものにしておく一方で、できる者には当面の学習事項よりちょっと先の課題に挑戦させたり、まわりの席で困っているものの手助けを指示したりした。たとえば返り点の学習なら、その時間の目標は読み順が解るということだが、すでにそこ迄到達した者には短文(白文)を適当に板書しておいて必要な所に返り点をつけてさせてみた。また、生徒同士で教え合うのは一種のグループ学習ともなった。

指導に当たって繰り返し訴えたのは「返り点は便利なものである、読みを助けてくれるものだ」ということだった。返り点を理解するのが目標ではない、漢文を読むのが目標なのだ、返り点はそれを助けてくれるもので、いわば自分達の味方だと生徒は理解したようだ。

③ 音読の重視

返り点の学習が一通り済むと、ただちにまとまった内容の文の学習に入った。普通はこの段階では引き続き漢文の構造や再読文字などの基本を学習するのだが、それはせめて週一時間、年間三十時間ほどの学習時間が確保されている場合のことであろう。残りの数時間で何を讀むか、何を教えられるか。中学では詩を学習した者が多いようだったので、寧ろ詩以外のものを紹介したいと思った。教科書の入門單元から『韓非子』の「守株」「不死之薬」を取り上げ、内容の理解と共に音読の重視を計った。

範読と斉読を繰り返すうちにはじめは小さな声しかだせなかつた生徒も段々大きな声ができるようになり、そうすると声をだすこと自体が快く感じられるのであろうか、ただ大きな声というのではなく教室全体が一つのハーモニーに包まれるようになる。音読を重視することにより、訓読の習熟、漢文の持つリズムを味わう、大きな声で読めるという自信を持つ、など幾つかの成果があつた。

④ 漢字学習との関連を計る

すでに述べたようにこの学年は週一時間を漢字テキストの学習に割かねばならなかつた。そこで、この漢字学習を他の二時間と切り離すのでなく、有機的な関係を作り出す

ことにより、一層の学習効果を上げたいと考えた。

漢字テキストの学習ではでき得る限り漢字熟語の構成について説明し、考えさせ、興味を持たせるようにし、漢文の学習では反対に一字一字についてどのような熟語が作れるかを考えさせたりえて、本文中での意味を確認するなどした。漢字学習は年間を通じての学習計画であつたので、漢文としてまとまつた学習時間のとれなかつた二学期にも折りに触れ漢文の話題を提供することができた。

2 二年生三学期の学習

三学期は国語Ⅰの学習のしめくくりとして、教科書の最終單元である「物語の楽しみ」という單元を取り上げることにした。この單元は『竹取物語』、白行簡の『三夢記』、千室の『搜神記』、宮沢賢治の『猫の事務所』から成り立っている。年間計画では三学期の学習に現代文を予定していたので、まず『猫の事務所』を選び、これとの組合せに時間数や生徒の関心なども考慮して『搜神記』からの一話を取り上げることとした。一学期によりやく漢文の入門を終えただけの生徒にはこの程度の短文でも量的にいささか負担が大きいかという懸念があつたが、一方でこのぐらいのまとまつた内容の漢文を讀み切れれば生徒に自信を与える

事にもなろうという期待もあった。

オースドックスな漢文学習の流れからいえば、入門を経た後、このあたりでは詩教材、思想教材を取り上げるべきであつたらう。このことは十分承知していたが、すでに述べたように年間の学習の流れからはまず第一に現代文との関連を考えねばならなかつた。また、詩教材は字数こそ少ないものの、深い読みを必要とする。漢文に不慣れた生徒にはかえつて抵抗があるのではない、かという不安があつた。さらに、思想教材は抽象的な内容から手応えのある反応を期待するには時間不足ではない、かという不安があつた。この学期の漢文には四・五時間を予定していた。

実際の授業は『搜神記』、『猫の事務所』の順に行つた。

『搜神記』の教材本文を次に記しておく。

晋武帝世、河間郡有男女私悅、許相配適。尋而男從軍、積年不歸。女家更欲適之。女不願行。父母逼之。不得已而去。尋病死。其男戍還、問女所在。其家具說之。乃至塚、欲哭之盡哀、而不勝其情。遂發塚開棺、女即蘇活。因負還家。將養數日、平復如初。後夫聞、乃往求之。其人_不還曰、卿婦已死。天下豈聞死人可復活耶。此天賜我。非卿婦也。

於是相訟。郡縣不能決。以讞廷尉。祕書郎王道奏、以精

誠乃至、感于天地。故死而更生。此非常事。不得以常禮斷此。請還開塚者。朝廷從其議。(卷一五)

晋の武帝の時代のこと、河間郡に結婚を誓ひあつた男女がいた。しかし、男は兵隊に採られたままいつまでも帰つてこない。女は両親の圧力に抗しかねて他の男のもとへ嫁いで往く。女は気の進まぬ結婚生活のためか、嫁いで間もなく病気で死んでしまう。女の死後、帰郷した男は恋人の死を聞かされ、取るものも取り合えず女の墓前に詣でる。悲しみの情に耐えかねて男は我を忘れて墓を暴き、棺の蓋を開けたところ、なんと女は息をふきかえず。男は女を背負つて自宅に連れ帰り、手厚く看病したところ女はまもなくもとのように元氣になつた。そこへ噂を聞きつけた夫が妻を返せと乗り込んでくるが、男は「あなたの妻はもう死んだのだ。死人が生き返るといふ話などは聞いたこともない。ここに居るのは天が私にお与え下さつた人だ。」と言つて、返さなかつた。事は裁判さたになるが郡や県の役所でも判断できなかつた。問題は遂に中央へ送られる。祕書郎王導は「純粹な真心が天地の神を感動させた結果、女は一度死んで新しく生まれ変わったのでございます。これは普通の事ではございません。従つて、尋常の考えをもっては判断できません。どうか墓を開けた者にこの女をお返し

になりますように。」と上奏した。朝廷はこの王導の意見にしたがった。

この教材には解釈の面で一・二考えるべき点がある。

それは「許相配適」の部分で、ここは「許されて相ひ配適す」とも「相ひ配適することを許す」ともとれよう。前者に考えるなら「ひそかに愛しあった男女はやがて親の許可を得てめでたく結婚した」という事になる。しかし、それなら其の後の文で「夫」たる者に対する呼称が「尋而男從軍」「其男戍還」「其人丕還」などあって、「夫」とはされていないのは腑に落ちない。女についても同様である。「女家」「女不願行」「問女所在」「女即蘇活」といった具合で「妻」としての呼ばれかたとしては少し妙な気がする。しかも、男の出征中に女が結婚した人物については「後夫聞」とはつきり「夫」としているのに、である。さらに、問題点を出せば「後夫」は「こうふ」なのか「のち、おっと」なのか。もちろん、「許相配適」を結婚したととるなら、「後夫」をどちらに読もうと最初の夫に対する呼称に不審が残る事に変わりはないが。

さて、それでは「許相配適」を「結婚を許す」としたらどうであろうか。婚約中に男が戦争に行き、女は羨々別の男のもとへ嫁いだというなら、「後夫聞」で「夫」が使わ

れていても異とするにあたらない。読みも「のち、おっと」で問題がなからう。「こうふ」と読むことはあり得ない。

しかし、この場合も、親が許したと考えるのが普通であろうが、すぐ前の「男女私悦」に注目するなら「親の許可のないまま、当人同士が結婚を誓いあった」ともとれるのではないか。ここにも一つ考えるべき点がある。親も認められた婚約でありながら、男が戦から帰ってこないというので別の結婚を勧める親と無理強いされる娘という設定なのか。親には内緒で結婚を誓ったものの、男は戦から帰らず、そうとは知らぬ親が娘に結婚を勧めているのか。親の方でもうすうすは承知しているながら、知らぬ顔で「良縁」を押し付けようとしたものか。読み手の想像はいよいよふくらんでゆく。

いうまでもなく、この話の興味の中心は死んだものが生き返るという奇跡と王導の裁きの小気味よさにあるといえよう。にもかかわらず、この話の出だしにはすでに読者をひきつけるだけの魅力がある。其の魅力は決して安直な興味本位の関心をかきたたせるものではなく、人間が生きているという事、つまり家族があり、社会があり、国がありという仕組みのなかで人は生きてゆかねばならないということ

を改めて考えさせてくれるという点にあらう。

三学期は次のような点に留意して授業を進めた。

① 一学期の教材より長い漢文を読み、漢文訓読に習熟する

一学期にも音読を重視したが、さらに今度は積極的に発表できるようにとすることを訴えた。クラス全体で読みの練習をした後、生徒からの挙手を待った。初めは互いに顔を見合わせているが、やがてめいめい熱心に教科書を読み出し、教室のなかは適度の緊張感が支配する。しかし、実際に手を挙げさせるにはいろいろ工夫も必要であった。

そのようななかで、ある生徒が挙手をした。無口で、日頃クラスのなかでも孤立している生徒だった。後から聞いた話だが、クラブ活動での発表の際、入念な準備をしておきながらいざとなると一言も口を利かず、ついに他の生徒が彼に代わって発表したのだという。そういう生徒に読む気を起こさせる力が訓読のリズムのなかにはあるのだから。彼は作文にこう書いた。

へ自分ではこんなに積極的に勉強したのは始めてだったし何度も自分から手を上げて読むなんてことは（これまで）なかった。おかげで内容が良くわかりました。復活（教科書でのタイトル）の感想ですが、あんなみじかい文

なのに大編の小説を読んでいるようでした。それだけ中味の濃いものでした。（中略）私はこの文ほど後がきに（気に）なり、人々のかなしみやおどろき、よるこびがかんじられるものはありませんでした。また機会があったら漢文を勉強したいものです。

（ ）内は筆者注。表記は原文のまま。

② 物語の展開に即して登場人物の言動に注意を払い、時代状況・人々の死生観を考える

ここでは先に述べたような主人公の男女は結婚していたのかどうかという事から話題にして、それぞれの場合の登場人物が置かれた状況を考えて。男の帰りを待ちわびる女、女を残して戦に駆り出されたまま故郷に帰れぬ男、娘を思う両親の気持ちなど。また、ようやく帰郷してみれば愛する者は死んでいたという悲しみのどん底から、墓を暴くという狂気を経て女の蘇生を迎えた男の歓喜、妻を亡くした悲しみも癒えぬうちに、亡妻が生き返って他の男に養われていると聞かされた男の困惑。

起伏に富んだ展開に導かれて生徒の関心も高まり、生徒の方からの発言も多かった。示された訳をただ筆記するというのではなく、積極的に読み解いてゆこうという姿勢が見られた。

肩のこらないおもしろい話だというだけの反応しかないのでは、この学年のこの時期の漢文教材として不適當との非りを免れまい。次に紹介する生徒の感想文は、この物語の背景の戦争に注目したものである。

〈漢文の学習は難しかった。でも、二回目の学習なので読みはすぐに読めるようになったのでよかった。「復活」という話は戦争のために離ればなれになってしまつてとてかわいそうだった。それとともに戦争というものはとてもにくいものだと思った。女はいつまでも男の帰りをまつていたけど結局は他の男と結婚させられてしまった。女はどのくらいつらかったのだろうか、きつと死ぬほどつらかったのだろうかと思う。そのくらいこの男女の愛は強いものだったのではないだろうかと思う。男はたぶん戦争中でも女のことを思いつづけていたのだからと思う。戦争が終わつてやっと女といっしょになれると思いきつと喜んでいたのでろうに……。それが他の男と結婚してしまつていて男はショックを受けたらうなと思う。でも一番つらかったのは女であらう。結局は男の気持ちを裏切つた形となつてしまい、しかも男とあらまえに死んでしまつて悲しかったらうと思う。でも戦争中にはこういう話がたくさんあつたのだから。〉

この感想文は高校生の文章表現としては幼いものの、この生徒が授業を通じて考え、読み取つた事は十分に伝えているといえよう。なかでも注目すべきは最後の「戦争中にはこういう話がたくさんあつたのだから」という箇所だ。

愛しあつていた男女を引き裂いたのは戦争だ、戦争はよくない、というレヴェルから一步踏み込んでいる。つまり、単にこの物語の悲劇性の原因を戦争に求め、登場人物の誰もが被害者であるという読み方は、その視点をあくまでこの教材に固定したところからのものである。したがって、その「悲劇」は具体的だが「戦争」は観念的なものになりがちだ。ところがこの生徒は視点を自己の生きる現代に置いてみたのだ。そこからは中国残留孤児の問題も、まもなく修学旅行で訪れる予定の「ヒロシマ」も、オリンピックをめぐる朝鮮半島も見えたはずだ。この物語の舞台である東晋の時代以前にも、それ以後も、なんと今にいたるまで「たくさん」の物語のある事に彼は気づいている。

③ 王導の論理の巧みさを味わう。

後半は論理的な読みを重視してつぎのような解釈に沿つて「男・夫・王導」の考えを整理しながら授業を進めた。

物語の前半を興味深い展開に助けられて読み進んできても、女をめぐる男達の主張とそれを裁いた王導の論理の巧

夫	妻と同一人物だ(常識) 生き返ったのだ(反常識)	それぞれ弱みがあり解決せず ←「相訟」 ←「謙廷尉」
男	死人が生き返るものか(常識) 別人だ(反常識)	
郡	秩序・常識を重視↓同一人物に間違いないが死人が生き返るはずもない	矛盾を来すので解決せず
王導	常識に拘らず現実を直視↓女は一度死んで別人として生き返ったのだ	解決

みさが味わえなくては何もならない。

生徒は概して抽象的、論理的な思考に不慣れであった。決して能力がないわけではない。思考に必要な時間を与えられぬまま結果だけ押し付けられたり、まごまごしているうちに高校までできてしまったというところだ。

比較的少ない字数でしっかりと論理の筋道を学習するには漢文の文脈を辿らせるのが一番有効だと考えていたの
で、図に示したように「常識に叶った判断・主張」と「常識的には認め難い判断・主張」とを見極めつつ読んで行ったのだが、最後の王導の名判断が常識にとらわれない柔軟な思考から生まれていることに気付いた生徒が一瞬息を飲んだ表情を見せたのが印象的だった。

④ 漢字一字一字を丁寧に読み、漢文の基礎的な語法や熟語を学ぶ

ドラマティックな展開のなかで「尋・更・乃・而・遂・即・因・已・豈一耶」などの語の働きを重点的に指導すると共に、「私・配・従軍・積年・不帰・逼・不得已・具・堯」などの漢字・熟語について日常の用法を紹介・確認した。

3 漢文学習の意義と展望

一年間の学習を終えて思うことは、工業高校のように国語の単位数が少なく、どちらかといえば基礎学力に不安のある生徒が対象であっても漢文学習は十分に成り立つという事である。

一般的に漢文単元が敬遠されるのは次のような点からであろう。すなわち、「生徒は漢字に抵抗感がある、現代文でも読めないのに漢文は無理だ。」というものだ。しかし、漢字に抵抗感があるなら尚更、漢字に親しむ機会が欲しい。現代文教材から漢字を拾い出して覚えさせるよりもっと多くの漢字について学習する機会が漢文教材にはある。漢字練習帳を使って効率良く漢字の学習をさせるより、効率はどう低下するように見えても命の吹きこまれた漢字に

接する効果は測り知れない。現代文教材は何ページにもわたるものが多いが、学力の低い生徒にはこれが案外負担になっていられる。どこに何が書いてあったのか、全体の配置が一目瞭然に解るものでないと意欲がそがれがちだ。しかし見開き二ページに収まるような現代文教材は多くはない。生徒の感想文にもあった事だが短文と見えて中身の濃いのが漢文だ。わずかな字数で豊かな内容を表現している漢文体に親しむことは作文学習にも有益だ。

学習意欲の低い生徒の指導には様々な工夫が必要であろう。しかし、どんな工夫もその基本は主体的に学習に向かわせるといふものでなければなるまい。生徒が不安を持っていたり、疎外感を感じていたり、心身共に窮屈な状態では無理な注文といえよう。その点、漢文の音読は繰り返しによって、まず不安が取り除かれ、自分の声を聞く事で授業に参加しているという自信を持ち、大きな声で発声するために姿勢も正しく、爽快な気分での学習に向かえるという利点がある。

次に大事な事はこうした学習体験が漢文学習以外の国語の学習にも良い影響を与えるという事だ。こうしてみると、むしろ漢文学習を核にしての国語教育という展開の可能性さえあり得る。すくなくとも漢文を現代文・古文のあ

とに続く第三の教材とみるようなことでは国語学習の成果は得られないだろう。現代文教材のなかで漢文に関わるような事柄の学習はそう多くは望めない。反対に漢文教材のなかではすでに紹介した「復活」がそうであったように現代文教材と重なる内容を取り上げる事もできる。総単位数が少ないからこそ漢文の比率を高めてのより効果的な指導の工夫が必要となる。

注

(1) 東京都工業高等学校国語科教育研究会会報第八号に載せられた資料によれば都立工業高校の履修状況は左のようなもので

[昭和61年度]
教科 国語履修状況
工業科 (全日制課程)

年	科目	単位数	1	2	3	4	校数
1	国語 I			1	10	16	27
2	国語 I			4	6		10
	国語 II			7	11		18
3	国語 II			14	8	3	25
	国語 表現			1	1		2

工業科 (定時制課程)

年	科目	単位数	1	2	3	4	校数
1	国語 I			14	3	1	18
2	国語 I			15	3		18
3	国語 II			18			18
	国語 II			17			17
4	国語 表現		1				1
	古 典				1		1

ある。ただ、この表からは個々の学校ごとの、卒業に要する単位数ははっきりしない。平均は一年三・六時間、二年二・六時間、三年二・五時間となる。

(2) 三省堂「高等学校国語I」

(3) 一年生の授業では三学期を漢文の学習にあてた。教科書は角川の「精選国語I」を使用。導入部の指導は二年生の一学期の指導とはほぼ同様に進めたが教材の扱いは少し趣を変えてみた。『韓非子』の「守株」と『礼記』の「苛政猛於虎」を取り上げて、儒家と法家の考えを中心に思想の初歩的な指導を試みた。その後、唐詩について少しふれ、王維の「送元二使安西」を読んで一年の漢文学習をしめくくった。三クラス平均でおよそ十二時間の指導であった。

(4) 都立成瀬高校の藤井重行氏は群読の指導を漢文にも応用された。「鴻門之会」の生徒による群読は興味深いものであった。

(筑波大学附属高校)